



B児

繰り返される 試行錯誤

自発的な活動一つの遊びのまっ



「ダイヤモンドが出た」担任は、A児に手を引かれ、彼らの遊びの拠点である土管へ駆け寄った。「先生、ほら宝石！」一緒に遊んでいたB児がレンガを指差す。そこには、確かに白く光る小さな石のつぶがあった。「ちよつとよく見えないから、貸してみて」レンガを受け取った担任は、顔を近づけ、じいっとしばらく見入った。「ほんとだ、先生にも見えた。本物だ。これどうやって見つけたの」担任の問いかけに、A児たちは、レンガを割った中から宝石が現れたというのを、身振り手振りを交えながら、興奮気味に話した。「こつちのレンガには黄色の宝石があったよ」「他の石にも宝石が隠れているかも」その後、園庭中の氣に

なる石やレンガを集め、観察を続けた子供たちは、この日も降園時に、宝石探しの一部始終を、自信満々にみんなに伝えたのだった。次の日、再び土管周辺に集まった子供たち。保育室から持ってきた虫眼鏡で宝石を確認している。「宝石、取り出したい」「これで叩き割ろう」昨年の遊び、探検隊ごっこで使った木製のトンカチが保育室にまだ残っていたらしい。A児たちは、そのトンカチでレンガを叩き割り、宝石を取り出すというもくろみのようだ。ドンツ。A児たちは、レンガめがけて木製トンカチを思い切り振り下ろした。「全然だめだ」「トンカチなのになー」「このトンカチだめだ」何度やっても、びくともしないレンガ。それどころか、木製トンカチはたちまちにぼこぼこ、へこんでしまう。そこへ、「つくつてきたぞー」と、紙材でつくつたトンカチを持ってC児が登場。周囲から期待のまなざしを向けられたものの、やはりレンガは割れるわけなく、「これもだめか」「子供たちは落胆するのだった。C児が、本物のトンカチがあればなあ。」とつぶやいた。「続く」

遊びの「こ」が面白い
試行錯誤するほど広がる謎

本通信22号において、素朴な問いや興味・関心が、プロセスを経てより洗練されていく学びのイメージについて紹介しました。前号からの続編であるA児らの遊びは、偶然発見した橙色の石「レンガ」に対する興味・関心、素朴な問い(他の石と違うのかな?)から始まっています。レンガに触れ、あれこれ自由に関わる中で、「こうしてみたい」「こうしたらどうなるだろう」などの様々なイメージを湧かせ、レンガへの関わり方をどんどん工夫したくなっていく子供たち。A児たちは「宝石は取り出せるのか」「取り出せるとしたらどんな道具が必要で、どうやって取り出すのか」「これはどうだ?」「あれはどうだ?」と、思いついたことから試行錯誤を繰り返します。そして繰り返すたびに、問い(謎)が、広がっていきましました。木製・紙製のトンカチではどうにもならないことに気が付いた子供たち。C児は、本物のトンカチを知っているようです。さて、どうなるのでしょうか。

ちよつとメモ



現在、次期3要領・指針の改訂に向けて協議が行われています。議事録に目を通すと、遊びの中での直接的・具体的な体験の一層の充実、すなわち、自発的な活動としての遊びを通して育んでいくことの重要性が改めて確認されていることが分かります。平成元年改訂から現行の流れを汲み、今後一層、環境を通して行う教育を基本とした遊びの充実が、求められていくことになりそうです。